【 教科名 】

（１）国語の定着状況の概要

昨年度

２年　「基礎」は、目標値の 74.5 に対し、正答率は 83.8。「活用」は、目標値の 63.0 に対し、正答率は 59.6 であった。
「基礎」の正答率は目標値を上回ったが、「活用」では目標値を下回った。「書くこと」の領域に課題が見られる。

３年　「基礎」は、目標値の 69.5 に対し、正答率は 75.6。「活用」は、目標値の 64.0 に対し、正答率は 66.8 であった。
「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。問題の内容では、「調べたことを発表する」に課題が見られた。

４年　「基礎」は、目標値の 69.5 に対し、正答率は 75.6。「活用」は、目標値の 64.0 に対し、正答率は 66.8 であった。
「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。問題の内容では、「調べたことを発表する」に課題が見られた。

５年　「基礎」は、目標値の 72.6 に対し、正答率は 80.1。「活用」は、目標値の 52.0 に対し、正答率は 59.5 であった。
「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。特に、読み取る力や聞き取る力が身に付いていることが分かる。￥

今年度

２年　「基礎」は、目標値の 84.2 に対し、正答率は 90.5。「活用」は、目標値の 50.0 に対し、正答率は 53.2 であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

３年　「基礎」は、目標値の 74.5 に対し、正答率は 74.2。「活用」は、目標値の 63.0 に対し、正答率は 63.5 であった。
「基礎」「活用」共に、正答率は目標値と同程度である。問題の内容では、特に「ことばの学習」や「作文」に大きな課題が見られた。

４年　「基礎」は、目標値の 70.7 に対し、正答率は 78.1 。「活用」は、目標値の 55.0 に対し、正答率は 59.2 であった。
「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。問題の内容では、「インタビューをする」に課題が見られた。

５年　「基礎」は、目標値の 72.4 に対し、正答率は 72.9。「活用」は、目標値の 57.0 に対し、正答率は 59.7 であった。
「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。問題の内容では、「説明文の内ようを読み取る」と「作文」に課題が見られた。

６年　「基礎」は、目標値の 73.0 に対し、正答率は 76.8. 「活用」は、目標値の 44.0 に対し、正答率は 46.1 であった。
「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。問題の内容では、「漢字を書く」に課題が見られた。

（２）具体的な課題とその原因

２年　「文章を書く」の問題のみ、目標値 75.0 に対して正答率 72.2 と下回っている。記述式の問題に抵抗感があることや慣れていないことが原因と考える。

３年　「作文」の問題が目標値を大きく下回っている。書くことへの習熟が不足していたと考えられる。

４年　どの問題の内容も目標値を上回ったものの、「インタビューをする」が目標値の 45.0 に対し、正答率は 48.6 ということから、「話すこと・聞くこと」にやや課題があると考えられる。文章の前後の関係を読み取り、条件に合うように書く力が不足していることが原因だと考える。

５年　「説明文の内ようを読み取る」では、目標値 68.3 に対し正答率が 65.2 と僅かに下回っている。「作文」では、目標値 61.3 に対し正答率が 42.0 と課題があることが分かる。自分の考えが明確になるように、具体的に文章を書く力が不足していることが原因だと考える。

６年　「漢字を書く」の問題のみ、目標値 68.8 に対し正答率が 60.2 と下回っている。漢字を書くことに苦手意識をもっていたり、意欲的に漢字を書こうという意識を十分に身に付いていなかったりしたことが原因だと考える。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

２年は、引き続き日記の宿題を課すことや、他の教科でも自分の意見や考えを記述させる活動を増やしたり、書くときのポイントを丁寧に示したりしていく。

３年は、引き続き週末に日記の宿題を課すことや、国語だけでなく、自分の意見や考えを記述させる活動を増やしたり、必要な情報から自分の考えを整理したりといった、文章の組み立てに気を付けて書く活動の場を増やしていく。

４年は、実際のやり取りをイメージして問題に取り組むことや、指示されている条件を理解し条件に合った文章を書く力に課題があることから、国語だけではなく他教科においても、めあてや文章問題を読み何が問われているのかを考えさせたり、想像力を働かせて文章を読むように意識させる言葉がけをしたりする。

５年は、提示された条件に対し、自分の考えを踏まえて具体的に文章を書くことに課題があるので、授業内に条件作文を書いたり、他教科などでも取り組んだりして、自分の考えと条件を具体的に書く活動の場を増やしていく。

６年は、自主学習ノートに漢字を書かせたり、宿題の丸付けの仕方を工夫したりと、「漢字を覚えることは楽しい」、「積極的に使っていきたい」と思わせるような指導をしていく。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

２年は、「文章を書く」のみ目標値を下回っているので、次年度は上回るように指導していく。

３年は、今年度目標値を下回った「ことばの学習」、「説明文の読み取り」、「作文」を次年度は上回るように指導していく。

４年は、どの内容も目標値を越えており、おおむね良好な状況である。今回課題にあがった「文章を正しく読み、条件にあった書き方を考える」ことを中心に、今後も指導をしていく。

５年は、今年度目標値を下回った「説明文の内ようを読み取る」「作文」を次年度は上回るように指導していく。

６年は、今年度目標値を下回った「漢字を書く」を次年度は上回るように指導していく。

【 社会 】

（１）社会の定着状況の概要

昨年度

４年　「基礎」は、目標値の 71.1 に対し、正答率は 73.2。「活用」は、目標値の 46.7 に対し、正答率は 48.8 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

５年　「基礎」は、目標値の 64.3 に対し、正答率は 67.6。「活用」は、目標値の 51.0 に対し、正答率は 55.9 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

今年度

４年　「基礎」は、目標値の 68.5 に対し、正答率は 76.7。「活用」は、目標値の 53.8 に対し、正答率は 54.8 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

５年　「基礎」は、目標値の 55.3 に対し、正答率は 57.5。「活用」は、目標値の 56.0 に対し、正答率は 59.7 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

６年　「基礎」は、目標値の 65.6 に対し、正答率は 68.7。「活用」は、目標値の 62.5 に対し、正答率は 73.0 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

（２）具体的な課題とその原因

４年　どの大問においても、正答率が目標値を上回り、高い数値を示していた。しかし、「市の様子」の「地図中の交通の様子について、市の土地利用と関連付けて、地図を読み取り考える」問題では、目標値が 40.0 であるのに対し、正答率が 31.5 となっており、目標値を下回る結果であった。

資料を読み取ることそのものはできていても、資料と資料を関連付けて考えることに慣れていなかったことが原因と思われる。

５年　おおむね正答率が目標値と同じくらいか、やや上回る結果となったが、「地いきの発てんにつくした人々」に関しては、目標値 43.3 に対して正答率が 34.8 であった。この大問は３問で構成されているが、そのうち特に「地域の地形の特徴について資料を読み取る」問題は、目標値 40.0 に対して正答率が 24.3 であった。

資料を読むこと、そこから特徴を見出すことに課題があり、資料を「どう読むか」「そこから言えることは何か」ということが定着していないことが原因と思われる。

６年　どの大問においても、正答率が目標値を上回り、高い数値を示していた。しかし、「日本の農業と水産業」の「さいばい漁業の利点について資料をもとに考える」問題では、目標値が 75.0 であるのに対し、正答率が 64.9 となっており、目標値を下回る結果であった。

資料を読み取ることそのものはできていても、今問われている問いに対して何をどう答えるのかという考え方が定着していないことが原因と思われる。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

・４年は、まず「資料を見て分かること（事実）」と「資料から言えること（考察）」を整理すること、次に「資料と資料を関連付けることで見えてくること」について、しっかりと考える習慣をつける必要がある。そのために、個人で資料を読み取って事実と考察を書かせたり、ペアやグループで資料について議論させたりして、資料を多面的かつ深く読み取れるようにする。
・５年は、資料の読み方に慣れるところから始める必要がある。資料を見る「観点」を指導し、そこから「資料を見て分かること（事実）」と「資料から言えること（考察）」を整理することが必要である。
・６年は、資料を見る際に観点を問うなどして「その資料を読むポイント」に気付かせ、問いに対する答えを明確にしていく必要がある。そのために、ICT 機器を活用して資料を拡大して見せたり、ペアやグループで資料についての議論を行ったりして、資料の読み方・答え方について力をつけていく。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

・４年では、それぞれの仕事の内容や働く人の思いに関する問題で、推論や考察をできるようにし、目標値を上回ること。
・５年では、資料の読み方と、そこから見出したことをどうまとめるか、フラッシュなどの形式で合間の時間に覚えさせるなどして、目標値を上回ること。
・６年では、資料を読む観点やその問いに対する答え方を指導し、目標値を上回ること。

【 教科名 】

（１）算数の定着状況の概要

昨年度

２年　「基礎」は、目標値の 83.6 に対し、正答率は 86.7。「活用」は、目標値の 65.6 に対し、正答率は 61.7 であった。「基礎」の正答率は目標値を上回っており、「活用」の正答率は目標値を下回っている。

３年　「基礎」は、目標値の 77.7 に対し、正答率は 83.2。「活用」は、目標値の 55.8 に対し、正答率は 57.2 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回った。全国平均とほぼ同程度で、おおむね良好な状況である。

４年　「基礎」は、目標値の 77.8 に対し、正答率は 81.1。「活用」は、目標値の 62.9 に対し、正答率は 64.0 であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回った。全国平均とほぼ同程度で、おおむね良好な状況である。問題の内容別にみると、「かけ算」の目標値が 70.0 に対し、正答率が 64.3 と下回った。

５年　「基礎」は、目標値の 70.5 に対し、正答率は 73.7。「活用」は、目標値の 56.3 に対し、正答率は 60.1 であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回る結果となった。しかし、問題の内容別正答率を見ると、「面積」と「計算のきまり・変わり方調べ」の正答率が目標値を下回っていた。

今年度

２年　「基礎」は、目標値の 86.5 に対し、93.6。「活用」は目標値の 65.0 に対し、75.1 であった。「基礎」「活用」共に正答率は目標値を上回った。問題の内容別に見てもすべての問題で目標値を上回っている。

３年　「基礎」は、目標値の 76.6 に対し、正答率は 77。「活用」は、目標値の 53.3 に対し、正答率は 46.2 であった。「基礎」の正答率は目標値を上回っており、「活用」の正答率は目標値を下回っている。「量と測定」「図形」ともに目標値を下回っている。

４年　「基礎」は、目標値の 77.9 に対し、83.7。「活用」は目標値の 53.8 に対し、64.4 であった。「基礎」「活用」共に正答率は目標値を上回った。問題の内容別に見てもすべての問題で目標値を上回っている。

５年　「基礎」は、目標値の 69.6 に対し、正答率は 70.9。「活用」は、目標値の 52.1 に対し、53.7 であった。「基礎」「活用」共に正答率は目標値を上回った。一方、問題の内容別に見ると、「計算のふく習」「いろいろな形」「計算のきまり・変わり方調べ」の正答率が目標値を下回っていた。

６年　「基礎」は、目標値の 68.5 に対し、74.6。「活用」は目標値の 41.4 に対し、46.2 であった。「基礎」「活用」共に正答率は目標値を上回った。問題の内容別に見てもすべての問題で目標値を上回っている。

（２）具体的な課題とその原因

２年　どの項目も上回っているが、「図形領域」が平均値に近く、習熟が不足していたと考えられる。

３年　「時刻と時間」「はこの形」の正答率が大きく下回った。演習問題の習熟が不足していたと考えられる。

４年　「たし算・ひき算」の項目で、目標値を 0.5%下回った。筆算の反復練習や筆算の方法について習熟が不足していたと考えられる。

５年　「いろいろな形」は、目標値を 3.1 下回った。図形の特徴を活用して問題を解く力を育て切れなかった。「計算のきまり・変わり方調べ」は 2.5 下回った。四則の混じった計算や、２量の関係を読み取る力を育て切れなかった。

６年　「百分率とグラフ」の項目で、目標値 41.0 に対して正答率が 40.4 と下回っている。割合についての習熟が不足していたと考えられる。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

２年では、「図形領域」の復習を授業や家庭学習に取り入れるなど、指導の工夫に努める。

３年では、計算力は身に付いているが、反復練習を継続するとともに、「量と測定」「図形」などの復習内容を取り入れながら、既習内容を活用できるような指導の工夫に努める。

４年では、「たし算・ひき算」の筆算や文章問題の復習を授業や家庭学習に取り入れるなど、指導の工夫に努める。

５年では、授業改善を行う。知識の活用を連続的に行うことで課題解決を進めていく授業展開をしたり、表や記号を使うことで数量の関係を視覚的に理解できるようにしたりする。

６年では、計算する力を反復練習で身に付けさせるだけではなく、計算の意味や計算のしかたを既習事項をもとに考え、図や式、言葉などを用いてそれを表現できるようにすることを重視し、指導の工夫に努める。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

２年は、全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
３年は、全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
４年は、「足し算・ひき算」に関わる問題で、目標値を上回ることを目指す。
５年は、全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
６年は、全ての領域・問題内容で目標値を 5.0 以上を上回る正答率を目指す。

【 理科 】

（１）理科の定着状況の概要

昨年度

４年　「基礎」の目標値 73.3 に対し正答率は、76.6、「活用」の目標値 58.6 に対し正答率は 60.9 であった。「基礎」・「活用」ともに目標値を上回る結果となった。身近な自然と観察、植物の育ち方、風やゴムのはたらきなどの分野で目標値を上回っている。しかし、昆虫のからだのつくりや磁石の性質が目標値に達していなかった。

５年　「基礎」の目標値 73.4 に対し正答率は 78.5、「活用」の目標値 55.7 に対し正答率は 60.6 であった。「基礎」・「活用」ともに目標値を上回る結果となった。１年間の植物の成長、１年間の動物のようす、物の体積と温度などの分野で目標値を上回っている。天気のようすと気温などが目標値に達していなかった。

今年度

４年　「基礎」の目標値 65.8 に対し正答率は 68.3、「活用」の目標値 53.6 に対し正答率は 59.1 であった。「基礎」・「活用」ともに目標値を上回る結果となった。光の性質、風やゴムのはたらき、物の重さなどの分野で目標値を上回っている。一方で、電気の通り道、磁石の性質などが目標値に達していなかった。

５年　「基礎」の目標値 70.8 に対し正答率は 68.9、「活用」の目標値 53.6 に対し正答率は 47.4 であった。「基礎」・「活用」ともに目標値を下回る結果となった。年間の植物の成長、１年間の動物のようす、物の体積と温度などの分野で目標値を上回っている。一方で、電気のはたらき、物のあたたまり方などが目標値に達していなかった。

６年　「基礎」の目標値 66.0 に対し正答率は 68.1、「活用」の目標値 43.1 に対し正答率は 47.2 であった。「基礎」・「活用」ともに目標値を上回る結果となった。天気の変化、魚のたんじょう、流れる水のはたらきなどの分野で目標値を上回っている。一方で、ふりこのきまり、顕微鏡の使い方など目標値に達していなかった。

（２）具体的な課題とその原因

４年　「じしゃくの性質」の分野に関して、特に評価が低い問題は、「磁石のどのような性質を調べるための実験か推測することができる」問題で目標値 70.0 に対し、正答率 54.8 であった。また、「実験の結果からわかるゼムクリップの磁性について指摘することができる」問題も目標値 50.0 に対し、正答率 41.1 であった。磁石の性質に対する理解に課題がある。原因として、目で確認した磁石の性質を言語化して理解することができていないのではないかと考えられる。

５年　「物のあたたまり方」の分野に関して、特に評価が低い問題は「金属のあたたまり方をもとに、ゼムクリップのたおれる順番を推測することができる」問題で目標値 70.0 に対し、正答率 61.4 であった。また、「水のあたたまり方をもとに、投げ込みヒーターの先が長い理由を推測することができる」問題も目標値 30.0 に対し、正答率 11.4 であった。金属や水のあたたまり方への理解に課題がある。原因として、物体のあたたまり方と水のあたたまり方の知識が理解できていないのではないかと考えられる。

６年　「けんび鏡の使い方」の分野に関して、特に評価が低い問題は「カバーガラスについて理解している」問題で目標値 30.0 に対し、正答率 10.6 であった。また、「顕微鏡を正しい手順で使うことができる」問題で目標値 30.0 に対し、正答率 10.6 であった。顕微鏡の使い方への理解に課題がある。原因として、顕微鏡の操作を言語化しながら理解することができていないのではないかと考えられる。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

４年・５年・６年共に、区学力定着度調査用の復習課題を授業で活用する。また、定期的に復習の時間を設けることで知識の定着を図るようにする。

４年では、磁石の性質を整理して習得できるよう指導していく。また、電気の性質と関連付けながら指導していく。

５年では、既習事項を身の回りの自然現象に関連付けて考えられるように指導していく。また、４年までで学習した内容についても復習を行い、既習事項の定着を図る。

６年では、課題解決のための実験方法を児童が主体的に計画するような機会を多く設けていく。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

４年は、「電気の通り道」、「磁石の性質」などの分野では、デジタル教材等を活用し、知識として児童に定着させ、目標値の正答率を目指す。また、その他の領域に関しては、目標値を上回る正答率を目指す。

５年は、「電気のはたらき」、「物のあたたまり方」の分野では、デジタル教材等を活用し、児童が学習内容を深く理解できるようにし、目標値の正答率を目指す。その他の分野については、目標値を上回る正答率を目指す。

６年は、「ふりこのきまり」、「けんび鏡の使い方」の分野では、デジタル教材等を活用し、児童が学習内容を深く理解できるようにし、目標値の正答率を目指す。その他の分野については、目標値を上回る正答率を目指す。

教科； 国語

（１）国語の定着状況の概要

《昨年度》

7年 「基礎」の目標値 65.2 に対し、正答率は 66.9、「活用」の目標値 50.7 に対し、正答率は 57.1 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

8年 「基礎」の目標値 66.5 に対し、正答率は 67.2、「活用」の目標値 52.9 に対し、正答率は 62.3 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

《今年度》

7年 「基礎」の目標値 69.6 に対し、正答率は 77.4、「活用」の目標値 60.0 に対し、正答率は 65.9 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

8年 「基礎」の目標値 64.8 に対し、正答率は 68.5、「活用」の目標値 59.3 に対し、正答率は 68.0 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

9年 「基礎」の目標値 67.8 に対し、正答率は 75.5、「活用」の目標値 55.0 に対し、正答率は 69.3 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

（２）具体的な課題とその原因

7年 領域別正答率について全ての領域で目標値を上回ったが、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する領域で、特に「漢字を書く」が目標値 45.0 に対して同程度であった。求められている定着度に対して上回るよう、幅広く漢字を身に付ける必要がある。また、「書くこと」に関する領域で「調べたことをもとに資料を書く」が目標値 55.0 に対して 54.6 と若干下回った。自分の考えが伝わるように図表を用いて書く力が身に付いていないと思われる。

8年 領域別正答率について全ての領域で目標値を上回ったが、問題の内容別正答率を見ると「文法・語句に関する知識」について目標値 70.0 に対して 62.3 と下回っていた。文法や語句の単元の学習について学習事項が身に付くよう、より工夫を重ねて重点的に指導を行う必要がある。

9年 領域別正答率について全ての領域で目標値を上回ったが、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域での「漢字を書く」問題では目標値 71.3%に対して正答率 75.7%、「書くこと」に関する領域での「作文」の問題では目標値 66.0%に対して正答率 70.4%とあった。他の問題では、おおむね 10 ポイント程度上回っているのに対して、この二つの問題については 4 ポイント程度という点から、より一層の基礎の定着と活用ができることが求められる。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

７年は、「漢字」の学習で基礎的な力を積み上げていくために、授業の最初に練習時間を設け、確認テストに取り組み、家庭学習等で繰り返し練習を行う習慣を身に付けさせる。次に、「書くこと」の学習においては、目的や意図に応じて図表を入れる活動を行う。実物投影機などを利用した発表活動を通じて、自分の考えと図表の関係について意識を促し、書く力を身に付けさせる。

８年は、「文法・語句に関する知識」の学習事項を定着させるため、文法や語句の内容や働きを確認するだけではなく、例文など実用的な場面での用例などを学習し、より活用する力を高められる学習活動を設定していく。

９年は、まず「漢字」の学習において「書き取り」を重視した学習を行う。そのために毎時間漢字の学習を行い、様々な活動で漢字の反復学習を取り入れていく。また、「書くこと」の活動では、復習用プリント等を補助教材として活用し、提示された文章に対して考えをまとめる活動を多く設定する。そして指定された文章構成や字数を意識させ、その条件の中で明確に自分の考えと理由を書く指導を行っていく。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

７年は、漢字を書く問題や書くことの問題で正答率が改善し、全ての領域で目標値を上回ることを目指す。

８年は、文法・語句に関する知識の問題で正答率が改善し、全ての領域で目標値を上回ることを目指す。

教科；　社会

（１）昨年度の定着状況の概要

昨年度

７年　「基礎」の目標値 62.1 に対して，正答率 59.4,「活用」の目標値 47.0 に対して正答率 51.3 と,「活用」は目標値を上回っているが,「基礎」は目標値を下回っており，基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。

８年　「基礎」の目標値 56.1 に対して，正答率 51.8,「活用」の目標値 43.3 に対して正答率 41.6 と,「基礎」「活用」ともに，目標値を下回っており，特に基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。

今年度

７年　「基礎」の目標値 64.2 に対して正答率 64.4,「活用」の目標値 55.0 に対して正答率 62.9 と,「活用」は目標値を大きく上回っているが,「基礎」は目標値を僅かに上回る程度にとどまっており，基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。

８年　「基礎」の目標値 66.4 に対して正答率 66.6,「活用」の目標値 49.2 に対して正答率 55.9 と,「活用」は目標値を大きく上回っているが,「基礎」は目標値をわずかに上回る程度にとどまっており，基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。

９年　「基礎」の目標値 60.2 に対して正答率 60.4,「活用」の目標値 42.9 に対して正答率 51.0 と,「活用」は目標値を大きく上回っているが,「基礎」は目標値をわずかに上回る程度にとどまっており，基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。

（２）具体的な課題とその原因

７年　観点別正答率では，すべての観点で目標値を上回っていたが,「資料活用の技能」は目標値 62.0 に対して正答率 62.8 と僅かに上回る程度であった。基礎的な学習内容の定着を図るとともに,「資料活用の技能」を定着させていくことが課題である。原因としては，思考や表現を行う際に，自らの知識に頼り，資料などを根拠としようとしていないため，資料活用の必要性を感じていないことが考えられる。

８年　観点別正答率では,「資料活用の技能」は目標値 62.9 に対して正答率 62.1 と僅かに下回っていた。また，領域別正答率では歴史的分野が非常に高いのに対し，地理的分野では全てで低い数値であった。地理的分野に対する関心の低さも原因であると思うが，地図やグラフを読み取りに苦手意識をもっていることが原因であると考えられる。

９年　観点別正答率では，すべての観点で目標値を上回っていたが，問題の内容別正答率では,「ヨーロッパ人の出会いと全国統一」は目標値 57.5 に対して正答率 50.2,「近代の日本と世界」は目標値 55.0 に対して正答率 52.6 と下回っており，歴史的分野の定着が課題である。原因としては，それぞれの歴史的事象の因果関係や時代の流れをとらえることができていないことが考えられる。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

・７～９年で共通して，授業における課題解決の際に，資料の活用を必要とするような課題を工夫するとともに，資料を活用する場面を多々設けていく。また，基礎的な知識・理解の定着のために，授業内で既習内容を確認する時間を更に増やしていく。さらに，学習の中で社会的事象が生じる理由などを考えさせる発問を授業展開に取り入れていく。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

７・８年で共に，「資料活用の技能」の正答率を目標値よりも 1.0 以上，上回るようにする。

教科； 数学

（１）数学の定着状況の概要

昨年度

7年 「基礎」についての目標値が 74.5 に対し、正答率は 75.0、「活用」についての目標値が 64.3 に対し、正答率が 67.3 と「基礎」と「活用」共に目標値を上回り、概ね良好であると判断できる。

8年 「基礎」についての目標値が 60.5 に対し、正答率は 66.5、「活用」についての目標値が 46.7 に対し、正答率が 55.7 と、概ね良好であると判断できる。特に、「活用」については目標値を 10 近く上回っており、内容が十分に定着できていると判断できる。

今年度

7年 「基礎」についての目標値が 72.5 に対し、正答率は 73.6、「活用」についての目標値が 61.9 に対し、正答率が 66.6 となっていて、「基礎」と「活用」共に目標値を上回り、概ね良好であると判断できる。

8年 「基礎」についての目標値が 58.0 に対し、正答率は 58.8 とおおむね良好であると判断できる。また、「活用」についての目標値が 37.9 に対し、正答率が 35.6 とやや下回っていて、学習の見直しを行う必要があると判断できる。

9年 「基礎」についての目標値が 60.9 に対し、正答率は 68.5、「活用」についての目標値は 36.4 に対し、正答率が 40.1 となっていて、「基礎」と「活用」共に目標値を上回り、おおむね良好であると判断できる。

（２）具体的な課題とその原因

7年 「分数と小数」の計算と、「面積と体積」の計算、「単位量あたりの大きさ・平均」についての理解が全国平均を下回っている。特に、面積と体積の問題では全国平均を 7 近く下回っており、公式の理解や計算の練習が不足していると考えられる。

8年 「比例と反比例」と「資料のちらばりと整理」の分野では、全国平均を下回っている。特に、グラフの値の変化の様子を把握する分野で課題が見られ、“関数のグラフの概形や面積”と“式”の関係性が理解し、説明する力に課題があると考えられる。

9年 「図形の性質」の分野で、全国平均を下回っている。特に、平面図形の「多角形」や「内角・外角」などの性質の理解に課題が見られる。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

７年の基礎コースでは特に、前時の復習を入念に行い、定着状況の確認を行っていく。また、適宜、東京ベーシック・ドリルなど個々の定着状況の応じた単元別の課題を用い、計算技能を高められるような機会を設ける。

８年では、各教室に設置されたプロジェクターを活用し、関数や図形などの分野で有効に活用していく。

９年では、学期末や学年末などに、その期間の学習内容を総復習する時間を確保する。

７～９年では、区学力定着度調査用の復習課題を授業で活用する。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

７年では、「基礎」「活用」共に、正答率が目標値を 5.0 以上上回れるよう指導していく。

８年では、「基礎」「活用」共に、正答率が目標値を 5.0 以上上回れるよう指導していく。

教科； 理科

（１）理科の定着状況の概要

《昨年度》

7年　「基礎」の目標値 60.6 に対し、正答率 58.9、「活用」の目標値 54.4 に対し、正答率 50.3 であった。「基礎」の学習内容が十分に定着していないため、「活用」の値も達していないと考えられる。

8年　「基礎」の目標値 60.6 に対し、正答率 54.6、「活用」の目標値 42.0 に対し、正答率 38.5 であった。「基礎」「活用」共に目標値を下回り、学習内容が十分定着していない。

《今年度》

7年「基礎」の目標値 65.0 に対し正答率 65.2、「活用」の目標値 50.5 に対し正答率 41.5 であった。
「基礎」はおおむね良好であるが、「活用」が目標値を大幅に下回り、学習内容の見直しが必要と思われる。

8年「基礎」の目標値 58.1 に対し、正答率 52.7、「活用」の目標値 55.6 に対し、正答率 60.0 であった。
「基礎」は目標値を大幅に下回っているが「活用」は目標値を上回っており、基礎的な学習内容が十分定着していない。

9年「基礎」の目標値 55.4 に対し、正答率 50.4、「活用」の目標値 49.5 に対し、正答率 48.2 であった。
「活用」はおおむね良好であるが「基礎」は目標値を下回り、学習内容が十分定着していない。

（２）具体的な課題とその原因

7年　科学的な思考・表現が、目標値 55.1 に対し正答率 50.7 と低い値になっている。内容で見ると、生物単元がおおむね良好なのに対し、「物の燃え方」の目標値 58.3 に対し正答率 43.9、「月と太陽」の目標値 55.0 に対し正答率 44.9 と特に低く、この単元に課題があると思われる。また、自然への関心・意欲・態度が目標値 52.8 に対し正答率 46.6 となっている。理科的な現象に興味がないことから、学習意欲につながらず、深く考えることを苦手とすると思われる。

8年　科学的な思考・表現については目標値を上回っているが、内容で見ると特に「植物のからだのつくりとはたらき」と「地層」の単元に課題があることが分かる。ともに実験観察の不十分な単元であったため、知識が定着しにくかったのでと考えられる。

9年　「基礎」ができていないのは、基礎学力が十分身に付いていないためと思われる。特に、粒子とエネルギーの領域に課題が見られた。観点別では、自然事象についての知識・理解の正答率が低いことが、学習意欲につながらないと思われる。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

７年は、授業で実験観察を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、結果から考察することを訓練していく。また、身近な現象や生活関連のエピソードを紹介し、興味をもたせて指導していく。

８年は、授業で実験観察を多く取り入れ、結果から考察する機会を増やしている。また、観察・実験のしにくい単元でも演示実験を行うなど興味をもたせて指導していく。また、知識の確認を授業内で意識的に取り入れていく。

９年は、授業で、実験観察を多く取り入れ、結果から考察する機会を増やしている。教科書通りに結果が出ない場合も必ず原因があること、理科の技術は生活と関連があることなどを示し興味をもたせ指導していく。また、授業の導入や放課後の課題に区学力定着度調査用の復習課題を使用する。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

７年と８年共に、［基礎」では、目標値を上回ることを目指して基礎学力の定着を図る。また、「活用」では、目標値の９０％以上を目指して既習事項を活用する力を伸ばしていく。

令和元年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

教科；　英語

（１）英語の定着状況の概要

昨年度

８年　「基礎」の目標値 58.0 に対する正答率は 66.9、「活用」の目標値 49.0 に対し正答率は 60.2 であった。「基礎」も「活用」も目標値を大幅に上回っており、定着できている様子である。

今年度

８年　「基礎」の目標値 66.2 に対する正答率は 66.7、「活用」の目標値 46.0 に対し正答率は 47.0 であった。「基礎」も「活用」も目標値を上回っており、定着できている様子である。

９年　「基礎」の目標値 63.3 に対する正答率は 73.8、「活用」の目標値 49.0 に対し正答率は 57.7 であった。「基礎」も「活用」も目標値を大幅に上回っており、定着できている様子である。

（２）具体的な課題とその原因

８年　「語形・語法の知識・理解」を問う問題で、目標値 70.0 に対し正答率は 62.9 であった。全国平均正答率 64.2 と比べて僅かに下回っている。特に「所有代名詞」や「疑問詞を使った疑問文」の正答率が目標値より 10 程度低くなっている。その一方で、「長文の読み取り」の目標値 58.8 に対する正答率は 60.3 であった。このことから、英文を読んで概要を理解する力は身に付いているが、細かい語法の理解度が低いと言える。その要因として、授業内容を十分に理解していないことや、一度習った学習内容を定着させるための繰り返し学習が不足していることが挙げられる。

９年　「リスニング」の「対話文の応答」問題で、目標値 40.0 に対し正答率は 30.5 であった。これは、聴き取った内容に対して英語で問われる記述式問題である。その他の「表現」問題では、どれも目標値を大幅に上回っていることから、リスニングをしながら英語で文を表現するという複合的問題への苦手意識があることが考えられる。

（３）課題解決のための方策（取組指標）

８年は、スペリングコンテストを実施し、語彙力の定着を図る。また、本学力定着度調査の復習課題も活用しながら、以前の授業内容の復習と、繰り返し学習を通して理解度を高めていく。

９年は購入した教材を使用し、定期的にリスニング問題に取り組み、リスニングに対する苦手意識を払拭する。また、自分自身のことや身の回りのことについて表現する活動を増やし、英語で表現することへの抵抗感を減らすように、表現活動にも引き続き取り組んでいく。

（４）次年度の数値目標（成果指標）

８年は「語形・語法の知識・理解」の力を高めるとともに、全領域において目標値を上回る正答率を目指す。